

神のおとずれ

日本聖公会 神戸教区報



2017年
12月号
クリスマス号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
<http://www.nskk.org/kobe/>

発行責任者
司祭 芳我秀一

印刷所
文明堂印刷所

羊飼いの喜び

主教 オーガスチン 小林 尚明



ある夜、羊飼いたちが野宿しながら羊の番をしていますと、天使が近づきイエス様の誕生を知らせたと言います。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こ

そ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼いの葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。(ルカ福音書第二章十節〜)」と。なぜ羊飼いなのかと思います。イエス様の誕生、それは、「民全体に与えられる大きな喜び」と言われていますが、その喜びをなぜ最初に羊飼いたちに知らされたのでしょうか。聖書では、羊飼いといるのはどんなイメージなのかと言いますと、旧約聖書では、ひとつの理想の職業でした。旧約聖書の有名な人物、アブラハム、イサク、ヤコブはみんな羊飼いでした。遊牧生活をしてきたわけですから、モーセも一時期、羊飼いをし

ていましたし、有名なダビデ王も最初は羊飼いでした。そこから呼び出されて、立派な王様になっていくわけですから、イスラエルの羊飼いといるのは、牧草と水を求めてさまよわねばなりません。日本と違って、イスラエルは水があまりありませんし、牧草もあまりないのです。そういう生活の中で、牧草や水(井戸水ですが)を求めて旅をします。そうしますと、神様に正しい方向に導いてもらわなければ、牧草や水にありつけません。死活問題なんです。そういう神様に導かれて生活する、というのかひとつの理想の生活だったわけですから、そこに一つの信仰が生まれます。神様が私たちの羊飼いであって、私たちは神様に導かれている羊なのだ、という信仰です。有名な詩が旧約聖書にあります。「主は羊飼いで、わたしには何も欠

けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。(詩編二十三編)」。羊飼いであったダビデ王の歌です。神様が私の羊飼いで、私には欠けることがない、と神様への信頼を高らかに歌っています。しかし、この時代の後イスラエルの人々は遊牧生活を止めまして、定住生活に変わっていきまます。そうしますと、どういことが起こってくるかといえ、一つの理想としては羊飼いといるのがありますが、実際の生活の中では段々と羊飼いの社会的地位は下がっていきまます。有名なモーセの十戒というのがあります。その中の四番目の戒め、安息日を聖として、その日には労働をしてはいけない、というものです。

す。すると、人々は羊飼いのことをモーセの律法を守らない罪人、と考えるようになりまます。羊飼いたちも、自分たちは神様の律法を守っていないのだから、神様から愛されているわけがない。いつか神様から裁かれるかもしれない。しよせん自分たちは罪人だ、という思いになっていったのです。それがイエス様の時代の羊飼いです。しかし、その人々からは罪人と思われているような羊飼いの所に、イエス様の誕生が最初に伝えられたのです。そこに神様のやさしさ、どんな人をも神様は愛して下さるんだ、神様にとって不必要な人間は一人もないのだ、ということが明らかにされます。その神様が自分たちを愛して下さっているというのを知ったのが羊飼いたちのクリスマスです。羊飼いを愛して下さる神様が皆さんを愛して下さらないはずがありません。クリスマスを最初に祝った羊飼いたちと共に神様の愛を喜ぶクリスマスをお迎えください。(神戸教区主教)